

## 375号線の出来事

その日、私は午後から出張に出ている、職場に戻るため375号線を広方面へと車を走らせていた。ちょうど、小学校の下校の時刻と重なったようで、歩道を何人かの小学生が楽しそうに話をしながら歩いていた。

私は、

（職場に戻ったら、あの仕事を今日中に片づけて。はあ、今日は何時に帰れるかしら……。）

などと考えながら、車の中でため息を吐いていた。

しばらくすると、信号機のない横断歩道で待っている一人の男の子の姿が目に入った。学校帰りなのだろう。ランドセルを背負った小学四年生か五年生くらいの男の子だった。私も対向車もスピードを緩め、横断歩道の手前で車を止めた。男の子は小走りに横断歩道を渡っていった。その時だ。横断歩道を渡りきった男の子は、くるとこちらを向き直って、車の方へ深々と頭を下げたのである。

車を止めたついでに、お茶を飲もうとペットボトルを傾けていた私は、思いがけない男の子の姿に、驚くと同時に、あわててペットボトルを口から離し、こちらも頭を下げた。

しかし、もうその時には、男の子は再び向きを変え、家の方に向けて走り出していた。



「大人も子どもも、横断歩道を渡るときは、車が待つのが当たり前でも言わんばかりに、のんびりとおしゃべりをしながら歩いている。」  
私は再び車を走らせながら、つい数日前に聞いた話を思い出していた。私自身、忙しい時間帯に仕方ないと思いつつ、歩



行者が横断歩道を渡り終えるのをいらいらしながら待った経験は一度や二度ではない。中には、急ぎ足で渡っていく人もいれば、こちらに会釈をしながら渡っていく人もいる。

男の子の通う小学校では「横断歩道を渡り終えたら、車の人にお辞儀をしましょう。」という指導がされているのか、それとも、家でそうしなさいと教えられたのだろうか。しかし、男の子の行動には、誰かに言われたからやっていると素振りには全く感じられなかった。

男の子が少しはにかみながら、

（自分のために車を止めてくださって、ありがとうございました。）  
と言っている、そんな言葉が聞こえてきたような気がした。

歩行者が横断歩道で待っていれば、車が止まるのは当たり前のことだ。私には、この男の子のために止まってあげなければという特別な思いがあったわけではなかった。けれども、男の子は、その何気ない私の行為を自分に対する善意だと受け止め、「ありがとう」という感謝の心を表現したのではないだろうか。

私たちは、日常生活の様々な場面で「ありがとう」という感謝の心を表している。しかし、「これくらいは当たり前だ。」と、自分に向けられた善意に気が付かずに過ごしてしまっていることはないだろうか。また、善意に気付いて

も、感謝の気持ちを表せなかったということはないだろうか。少なくとも、男の子の行動に驚きを感じた私は、ただ「ありがとう」と言うことだけが、感謝の心を表す方法ではないことを、さらには、素直な「ありがとう」という思いが、こんなにも気持ちの良いものだということを改めて考えさせられた気がした。

（あの男の子のおかげだなあ……。さ

あ、早く戻ってもう一仕事頑張るか！）  
そんなことを考えながら、また私は車を走らせていた。

